様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　２１　年　５　月　２９　日現在

研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2006～2008 年度
課題番号：18520171
研究課題名（和文）　イギリス１８世紀における音楽と詩

研究課題名（英文）　Music and Poetry in Eighteenth Century Britain

研究代表者 高際澄雄　(TAKAGIWA SUMIO)
宇都宮大学・国際学部・教授
研究者番号：５００９２７０５

研究成果の概要：18 世紀イギリスの音楽と詩との関係は、音楽研究と文学研究が分離していたために長く解明されて来なかった。本研究では、18 世紀イギリス文学の研究者が CD や DVD などの記録を利用して当時のイギリスにおける音楽と詩の結び付き方を明らかにしたものである。これにより、詩に音楽を付す３形式が 17 世紀末に確立し、18 世紀に入ってまずイタリア歌劇で、1730 年代からオラトリオで独特の展開が行われたことが明らかにされた。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
平成１８年度	900,000	0	900,000
平成１９年度	600,000	180,000	780,000
平成２０年度	500,000	150.000	650,000
年度			
年度			
総　計	2,000,000	330,000	2,330,000

研究分野：
科研費の分科・細目：
キーワード：

１．研究開始当初の背景
（１）18 世紀イギリスの音楽作品は、その質に見合うだけの評価を得ていない。特に、その時期の中心であった歌劇が、アディソンやジョンソンから酷評されたために、イギリス文学史において無視してきたという事情がある。だがヘンデルの歌劇が近年ヨーロッパで再評価され、人気演目になっていることから分かる通り、当時優れた作品が生み出されていた。この事実を研究により明らかにする必要がある。
（２）18 世紀イギリスの音楽作品は、オード、歌劇、オラトリオが中心だが、その歌詞は、音楽研究者にも文学研究者にも無視されている。歌詞の音楽との関係を明らかにする必要がある。
２．研究の目的
（１）18 世紀イギリスにおける歌詞と音楽との関係を、オード、歌劇、オラトリオの分野において調査する。特に歌詞がどのように聴衆に提供されていたのかを明らかにする。
（２）18 世紀イギリスにおけるオード、歌劇、オラトリオの発展の様相を、18 世紀初頭、20 年代、30 年代、18 世紀中葉、18 世紀後期に分けて、明らかにする。
（３）18 世紀イギリスにおけるオード、歌劇、オラトリオの題材となった文学作品と音楽作品のテクストがどのような関係にあるの

か、およびテクストがどのように音楽的に処理されているのかを調査する。

３．研究の方法

（１）文学研究者にとって音楽研究が困難である最大の理由は、技術的な問題であるが、幸い、近年はテクノロジーの進歩により、レコードやテープはいうに及ばす、ビデオ、ＣＤ、ＤＶＤ、インターネットで演奏が記録されている。これらを利用することで、歌詞がどのように音楽的に処理されているかを調べられるようになった。本研究ではこの方法を最大限利用している。

（２）これまでの音楽史研究、および文学史研究の成果も最大限取り入れ、音楽的特徴、および文学的特徴についても、調査を行う。

（３）ロンドンの大英博物館のコレクション、およびいくつかのインターネット・サービスを利用して、楽譜、歌詞のテクスト、および18 世紀の公演時に発行されたワード･ブックの入手し、調査を行う。

４．研究成果

（１）詩の音楽的処理法

18 世紀イギリスにおいては､歌詞の音楽的処理には、次ぎの３つの型が存在した。

①レチタティーヴォ型　規則的な拍子をもたず、詩に内在する抑揚を強調するように音楽を付す作曲法。歌劇のレチタティーヴォがこの型の代表である。

②単純歌曲型　規則的な拍子をもち、基本的に１音節に１音を与えて音楽を付す作曲法。イギリス民謡と呼ばれるものに、この形式の歌曲が多い。

③アリア型　規則的な拍子をもつが、詩の１音節に３音以上与えられるメリスマ唱法が用いられ、語、句、行、節が繰り返されて歌われるように夫音楽を付す作曲法。歌劇のアリアがその代表であるが、オードやオラトリオにも用いられている。

（２）パーセルのオード作曲法

17 世紀末期に頂点に達したヘンリー･パーセルのオードは、歌詞であるオードを分割して、音楽化し、独唱曲、重唱曲、合唱曲として、それに器楽曲を加えて１つの大きな作品としている。重唱曲、合唱曲では、（１）で挙げた音楽的処理法の他に、大意法的処理と和声法的処理が施されて、重唱曲および合唱曲が作られている。

（３）パーセル以降のオード

18 世紀のオードは､歌詞の処理法の上では､17 世紀後半に徐々に開発された様式を越えることはなかった。すなわち、歌詞の処理法はヘンリー・パーセルによって高度に開発されており、ヘンデルによっても、イギリス人作曲家によっても、それ以上の処理法は開発されなかった。ヘンデルは、対位法的作曲法を大規模化し、楽器伴奏を巧妙化した。イギリス人作曲家は、パーセルにさらに歌詞の扱いの洗練化を行ったのである。

（４）セミオペラの実態

17 世紀末期に人気を博したセミオペラの実態は現在のＣＤやＤＶＤの記録からは把握しづらい。ＣＤは音楽部分しか記録しておらず、ＤＶＤに残されたイングランド国民歌劇場の 1995 年は音楽部分の脚色にすぎないからである。台本とＣＤを両方使うことによって再現すれば、パーセルの天才性はあきらかになる。彼は台詞劇では現実を、音楽部分では象徴性を使用しながら、優れた作品を創造した。セミオペラはイギリス独自のジャンルであった。

（５）イギリスへのイタリア歌劇導入

イギリスにイタリア歌劇が導入されたのは、アディスンが主張するように、少数の人々の間違った判断から行われたわけではない。多くの聴衆がその新しさに惹かれたためであった。ヘンデルの『リナルド』における大成功も、それまでのイタリア歌劇導入の努力が存在したことによって一層増幅されたのである。確かにそこにはヘンデルの天才性が明らかではあるが、社会的な潮流なくしては、その成功はあり得なかった。何より、イタリア的趣味をより強く表した次作『忠実な羊飼い』は、公演としては成功しなかったことに、そのことが示されている。アディスンはジョンソンだけの見解で歌劇を判断するのは危険である。

（６）ヘンデル作品の特質

ヘンデルの歌劇とオラトリオを広範に調査したウィントン・ディーンは、彼の作品の特質を劇性にあると主張したが、優れた演奏を記録したＣＤやＤＶＤから判断すると、この主張は正しい。ただし、歌劇『クレタ島のアリアンナ』や『ヨセフとその兄弟たち』を失敗作としていることから分かるように、個々の作品の評価に関しては、ディーンの判断が必ずしも正しいとは言えない。

（７）貴族歌劇団の評価

ヘンデルの伝記では､1733 年の貴族歌劇団設立は、ヘンデルへの嫌がらせと見る向きが多い。確かにこれでヘンデルが窮地に立たされたことは事実だが、ロンドンで彼のイタリア歌劇しか上演されていなかった事態の方が異常であり、他の作曲家の作品上演を意図したこと自体は正常である。実際最初の公演、ポルポラによる『ナクソス島のアリアンナ』は、分析して見ると優れた作品であり、そのために対抗心をかき立てられたヘンデルがその後､『アリオダンテ』と『アルチーナ』の２傑作を書くことになったと見るべきである。ヘンデルは挑戦を真正面から受け止めたというべきであろう。

（８）ヘンデルのイタリア歌劇への固執

第１次王立音楽アカデミーの破綻後も、ヘンデルがなぜイタリア歌劇に固執したのかは、まだ解明されていないが、1718 年に英語による台本で『エイシスとガラティア』や『エステル』などの優れた作品を創作したことを考えれば、英語が音楽化に向いていなかったとは考えていなかったことは明らかである。あるいはイギリス演劇のドラマトゥルギーとの違いを認識していたのかもしれないが、彼が次に選んだのは、演技の伴わない英語によるオラトリオであった。

（９）オラトリオにおける合唱の複雑さ

オラトリオにおいては演技が欠如している短所を合唱の雄弁さによって劇性を高めている。合唱の音楽的処理には、対位法的処理と和声法的処理が巧みに組み合わされて、直裁な表現と壮大な表現の双方が生み出されている。

（10）イギリス人作曲家によるオード

1736 年のヘンデルの『アレクサンドロスの饗宴』がイギリス人作曲家にオードへの興味を呼び起こし、いくつかのオードが作曲された。ボイスの２つの『聖セシリア祝日のオード』を分析すると、ヘンデルの大きな様式からイギリス伝統への簡潔な様式に回帰しようとしていることが分かる。とは言っても、その中には、はつらつとした気分を盛り込んだ前期古典主義の影響も看取できる。

（11）歌詞の出典

ボイスのセレナータ『ソロモン』は、歌詞の選び方が明らかになる稀な例である。題材は聖書の『雅歌』によっているが、ここの歌に含まれる官能的表現を誇張して、クロックソールが 1720 年に『麗しきサーカシアびと』として匿名出版する。これを元に、おそらくボイスが友人ムアに依頼して、『ソロモン』の歌詞の制作を行った。この歌詞ではクロックソールの官能性が薄められている。さらにボイスは音楽化することで、官能性を排除し、道徳性を向上させた。出来上がった作品は感覚的に瑞々しさを保ちながら、中庸の美をたたえたものとなった。作品発表時の聴衆は、その変化をも楽しんだのであろうと想像できる。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 10 件）

（１）高際澄雄「ウィリアム・ボイス『ソロモン』における詩と音楽」『宇都宮大学国際学部研究論集』第 27 号査読有 2009 年 pp.23-37.

（２）高際澄雄「ボイス『聖セシリア祝日のオード』における詩と音楽」『外国文学』58 号査読無 2009 年 pp.35-48.

（３）高際澄雄「ヘンデル『ヨセフとその兄弟たち』における詩と音楽」『宇都宮大学国際学部研究論集』第 26 号査読有 2008 年 pp.105-116,

（４）高際澄雄「ヘンデル『クレタ島のアリアンナ』の作品的特質」『宇都宮大学国際学部研究論集』第 25 号査読有 2008 年 pp.97-109.

（５）高際澄雄「ポルポラ『ナクソス島のアリアンナ』の作品的特質」『外国文学』57 号査読無 2008 年 pp.77-89.

（６）高際澄雄「パーセル最後期の祝典オードにおける詩と音楽（下）」『宇都宮大学国際学部研究論集』第 24 号査読有 2007 年 pp.93-104.

（７）高際澄雄「ヘンデル『アン女王の誕生日のためのオード』における詩と音楽」『宇都宮大学国際学部研究論集』第 24 号査読有 2007 年 pp.105-114.

（８）高際澄雄「パーセル『妖精の女王』における詩と音楽」『宇都宮大学国際学部研究論集』第 23 号査読有 2007 年 pp73-88.

（９）高際澄雄「ヘンデルの『リナルド』における詩と音楽」『外国文学』56 号査読無 2007 年 pp.93-109.

（10）高際澄雄「パーセル最後期の祝典音楽における詩と音楽（上）」『宇都宮大学国際学部研究論集』第 22 号査読有 2006 年 pp.113-128.

〔学会発表〕（計 3 件）

（１）高際澄雄「ボイスのオードとセレナータにおける詩と音楽」日本ヘンデル協会 2008 年 11 月 30 日調布市文化会館

（２）高際澄雄「イギリス 18 世紀初頭における歌曲化の技法」18 世紀イギリス文学・文化研究会 2008 年 4 月 21 日専修大学

（３）高際澄雄「18 世紀イギリスにおけるスコットランド−ヘンデル・スモレット関係序説」日本ヘンデル協会 2006 年 11 月 29 日調布市文化会館

〔図書〕（計　　0 件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計　0 件）

○取得状況（計　0 件）

〔その他〕

なし

６．研究組織

(1)研究代表者

高際　澄雄　宇都宮大学・国際学部・教授

(2)研究分担者

高際　澄雄　宇都宮大学・国際学部・教授

(3)連携研究者

なし